～ 北 京 訪 問 記 ～

基盤研究部研究員　山口隆子

平成16年6月22日～25日に北京市で開催されたアジア大都市ネットワーク21「ヒートアイランド現象に関する国際シンポジウム」に参加する機会に恵まれました。ここでは、垣間見た北京事情をお伝えしたいと思います。

シンポジウム

北京植物園内の臥佛山庄という宿舎（臥佛寺の宿坊を内装だけ洋風に改装したものと思われる）で開催されました。北京の市街地から離れており、空気も澄み、朝は鳥の鳴き声で目覚めるという自然あふれる所でした。難点は虫の多さで、会議が終了し部屋（一軒家）へ戻ると、バスタブが真っ黒に虫で埋め尽くされている毎日でした。

シンポジウムの参加者（約40人）のほとんどが中国人であり、日本人が私を含め4名、インド人が2名でした。シンポジウムのほとんどが中国語で行われ、日本語に堪能な研究者が通訳をしてくれる程度であり、中国語が全くできない私はひたすら笑顔でコミュニケーションしていました。シンポジウムの内容は、ヒートアイランドに関する様々な研究紹介であり、私は「東京のヒートアイランドの現状と屋上緑化によるヒートアイランド緩和」について、報告しました。アジアにおいて先駆的な研究をしている日本人の発表は質問攻めでした。

北京の緑化

24日に北京市内での緑化事業の現場見学があり、2008年に開催されるオリンピック（緑のオリンピックというスローガン）に向け、日々緑地が増えていく様子が見られました。日本では計画策定から竣工まで早くても5～10年の歳月を要している公園事業が、3ヶ月～2年(最長)というスピードで進められており、そのあまりの速さに驚くとともに、うらやましくも思いました（写真手前が旧市街、奥が公園に整備されているが、この事業も3ヶ月足らずとのこと）。しかし、北京の伝統的家屋が急速に姿を消してしまい、庶民からは不満の声も出ているようです。維持管理に関しては、すべての緑地で潅水・施肥・剪定・農薬散布が毎日行われ、雇用創出という点では評価できますが、環境保護の観点からは、水不足への対応、化学物質による汚染など克服すべき課題が多く見られました。

北京の大気

市街地は常にスモッグがかかっており、晴天がまるで曇天のようでした（500m先は見えない）。一昔前まで自転車が全盛だった北京で、自動車が増え、工場が林立し、家庭での燃料が石炭なため、大

気汚染が悪化していると感じられました。大気汚染に比較して、ヒートアイランドの状況としては、特に市街地が暑くなっている感じ（東京の繁華街で感じる暑さ）ではありませんでした。

おわりに

事務局である北京市園林局の職員は管理職も含め女性が多く、仕事と家庭の両立は日本と同じく大変なものの、日本よりは社会的に女性が働くことが認知されており、決して特別なことではないとのことでしたが、子育ては万国共通の悩みのようです。

参加の機会を与えていただいた知事本局国際共同事業部、環境局、特に総務部企画調整課、環境科学研究所企画管理課、基盤研究部の皆様に感謝いたします。今後もこのような機会には、東京都職員が参加し、東京の現状を伝えるとともにアジアの諸都市と連携してアジアの持続可能な発展に貢献できればと思います。

＜中国科学技術部ビルから見た旧市街と整備された公園＞